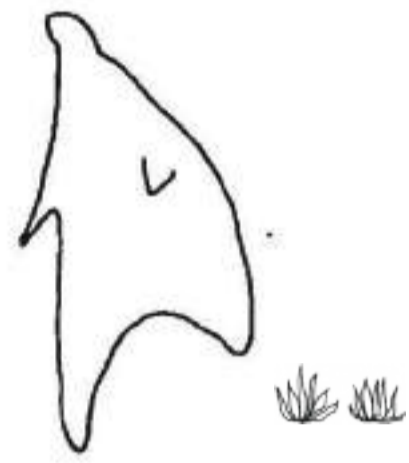
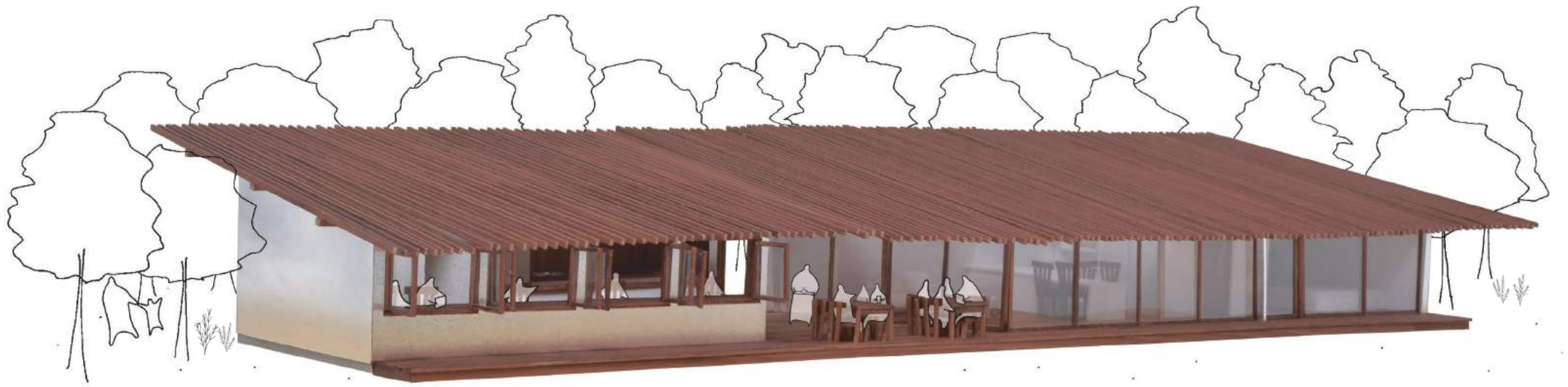


# 自然と溶け合う養蜂カフェ

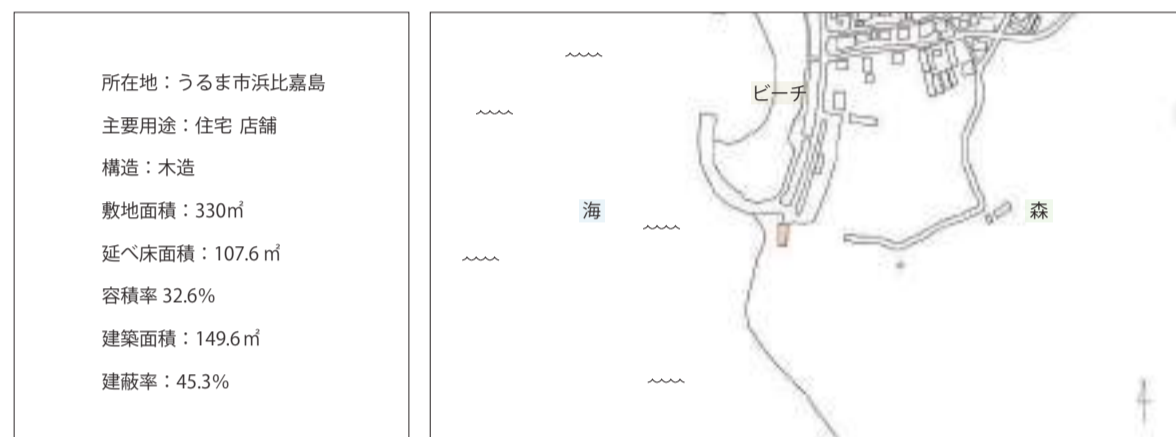
## ～ほどかれるプライバシー 紡がれる人々～



住宅という器の中に留まったプライバシーや家族の生活などだけでは住宅は成り立たないと考え、“住宅はプライバシーが大切”という考えを取り払い、職と住が絡み合うような住宅を提案する。

それぞれが完全に独立し、分断されがちな職と住だが、職と住がお互いに支え合うことでこの家は成り立っているとさえ思う。

### 概要



うるま市の寛大な海とおおらかな森に挟まれた敷地を今回の計画地とした。近くにはビーチがあり週末には島内外、多くの人々が集う。この地を訪れた人は浜比嘉島の自然というコンテンツに魅了されるだろう。

今回、おばあちゃんの一人暮らしの家を設計した。この家は夫婦がおばあちゃんのために建てた家であり、業種は養蜂とカフェである。おばあちゃんが養蜂、夫婦がこの家に来てカフェを切り盛りする。

元々おじいちゃんはおじいちゃんとおばあちゃん夫婦がフリーランスをしながら週末は移動式のバーを営んでいた。

しかし、おばあちゃんはある時独り身となった。ちょうどその時期に夫婦は店舗を構えてカフェを営みたいと考えており、おばあちゃんの一人暮らしの併用住宅を建てることにした。

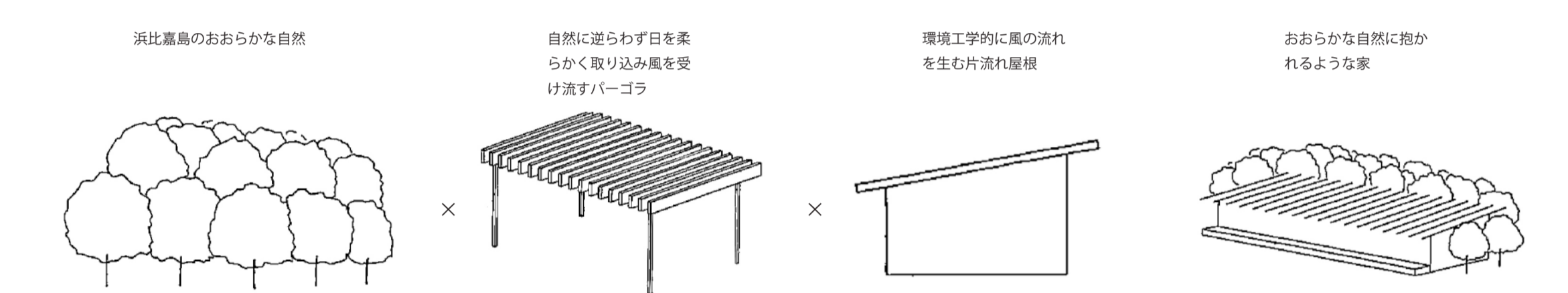
夫婦が平日はフリーランスの作業場としてこの家に来て、週末はカフェを切り盛りしに来ることで、おばあちゃんの様子を見つ、おばあちゃんの一人の時間も確保し、安心した暮らしを送れるようになった。

今までは養蜂でとれたちみつを出荷して終わりだったおばあちゃんだが、養蜂カフェを営むことで、おばあちゃんが作ったちみつを食べしてくれるお客さんを間近で見ることができ、以前よりおばあちゃん自身の社会への接続している意識が芽生える。

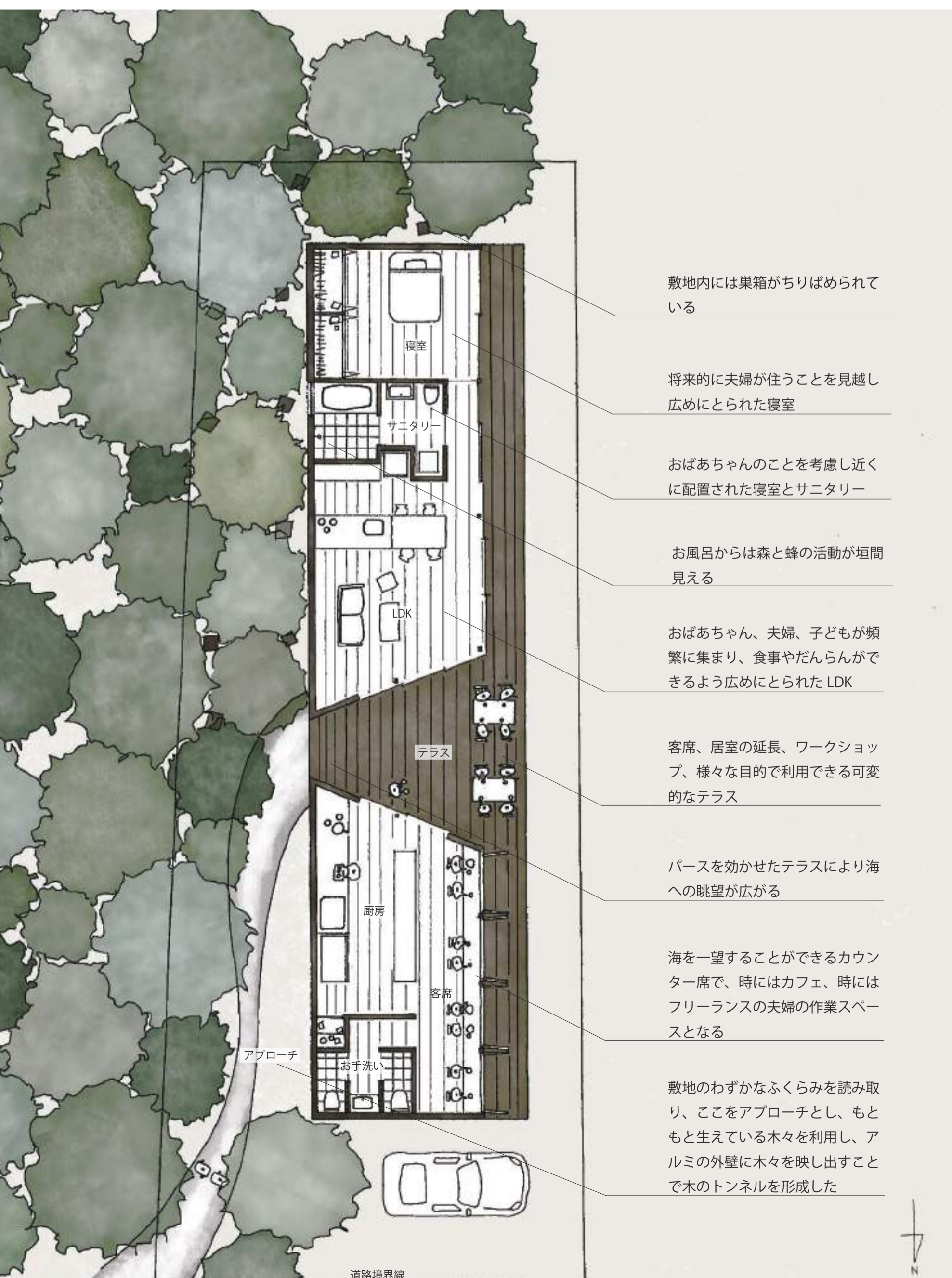
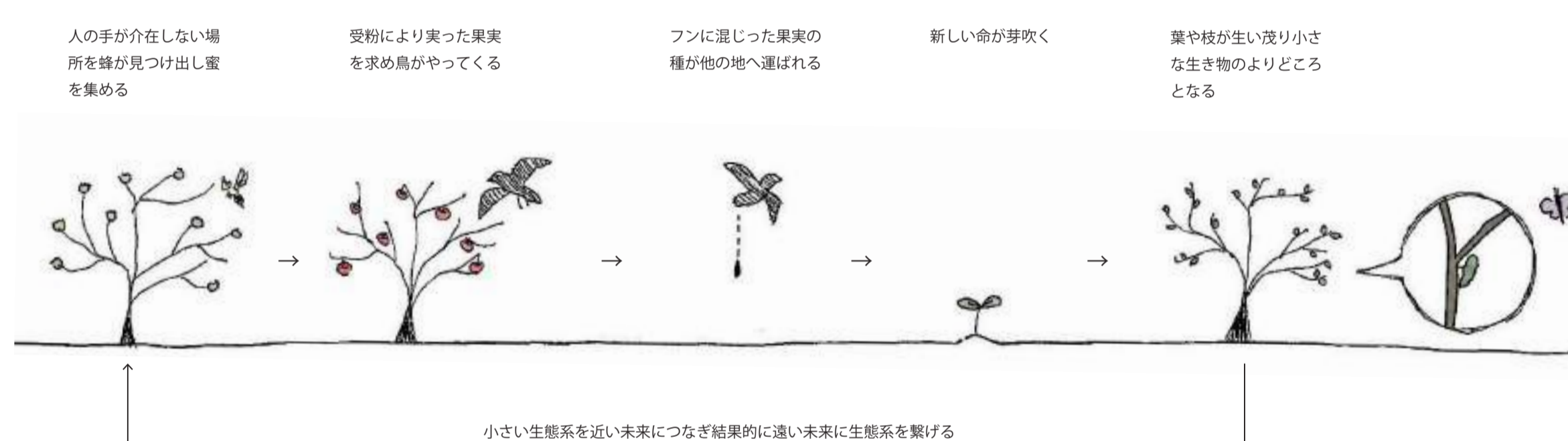
おばあちゃんが亡くなり、夫婦の子どもが独り立ちすると、この家は夫婦が住まう家となり、この家を“次世代につなげる”ことになる。



### 形態ダイアグラム



### 生態系ダイアグラム



敷地内には巣箱がちりばめられている

将来的に夫婦が住うことを見越し広めにとられた寝室

おばあちゃんのことを考慮し近くに配置された寝室とサニタリー

お風呂からは森と蜂の活動が垣間見える

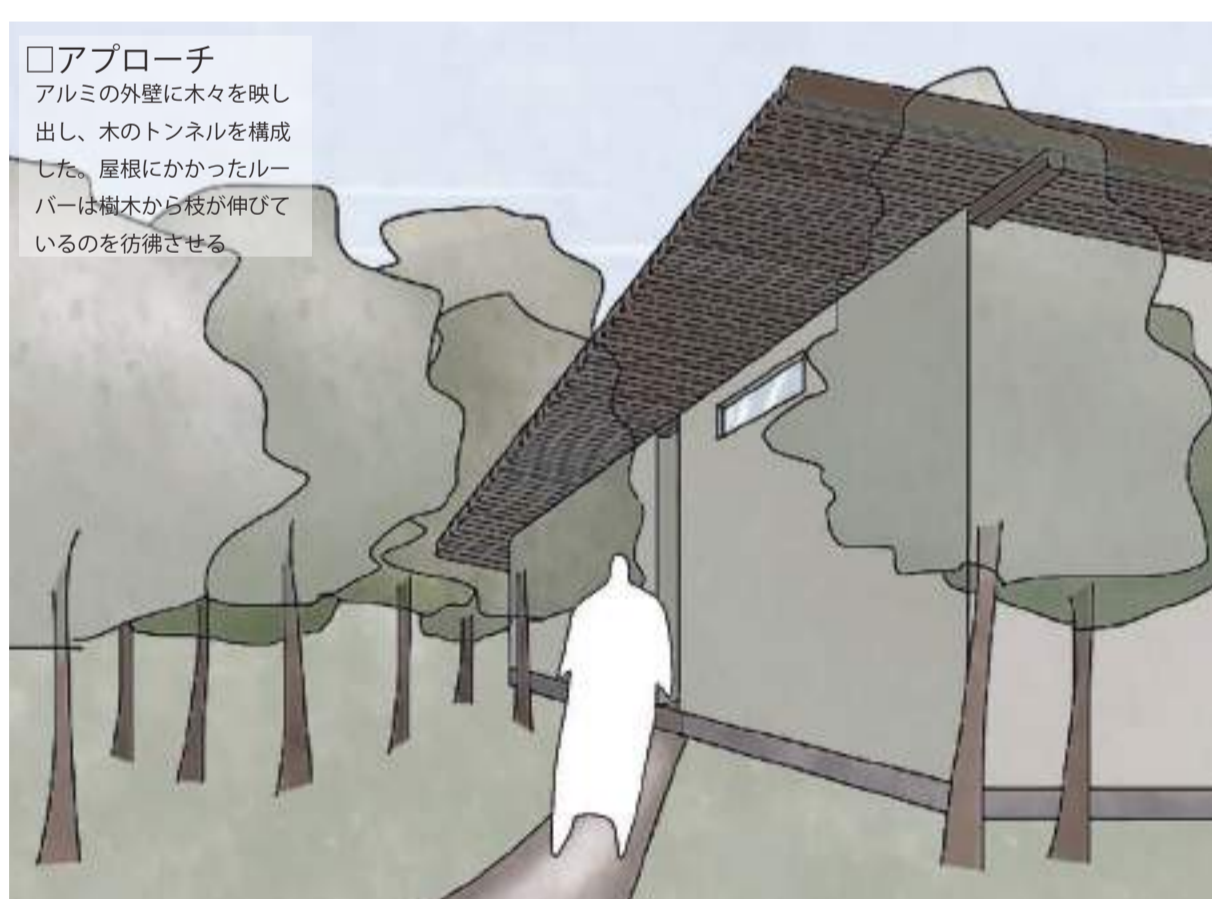
おばあちゃん、夫婦、子どもが頻りに集まり、食事やだんらんができるよう広めにとられたLDK

客席、居室の延長、ワークショップ、様々な目的で利用できる可変的なテラス

バスを効かせたテラスにより海への眺望が広がる

海を一望することができるカウンター席で、時にはカフェ、時にはフリーランスの夫婦の作業スペースとなる

敷地のわずかなふくらみを読み取り、ここをアプローチとし、もともと生えている木々を利用し、アルミの外壁に木々を映し出すことで木のトンネルを形成した



### アプローチ

アルミの外壁に木々を映し出し、木のトンネルを構成した。屋根にかかったルーバーは樹木から枝が伸びているのを彷彿させる。



### 客席

海や風、トップライトから差し込む柔らかな日差しが食事のスペースとなる

### 断面図

沖縄ではコンクリートで周りを固め、小さい窓を閉じる高気密高断熱の住宅が増えた。風の通る開放的な空間はなくなり、毎日変わらない環境下で生きることがなくなった。

子どもの頃の夏の盛り公園のパーゴラの下に身を置き涼をとったのがとても心地よかった。この住宅でもそんな人間的な快適さを感じる空間を作りたいと考えた。

海側に大きな開口を設けて海からの涼風を取り込み、熱せられたトップライトによりその風を上昇させて森側のハイサイドライトで抜く、風力換気と温度差換気を利用した通風計画とした。暑い時期にこそ日光を取り込むという逆転の発想。寒さが厳しい時には戸を閉めて頭上からの暖かな日差しを取り込み、室内の空気を暖める。

風や潮騒、木々のざわめきが抜けるこの家では太陽と月が光と影となって床や壁を過ぎ去り、刻々と変わりゆく様々な自然の事象に包まれる。

